

立教大学学術推進特別重点資金 (立教 S F R)

大学院学生研究

2018年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院 法学 研究科 法学政治学 専攻		
研究代表者 (2019年3月現在のものを記入)	在籍課程・学年・学生番号		氏名
	<input type="checkbox"/> 博士前期課程 年 <input checked="" type="checkbox"/> 博士後期課程 2年 17TD003P		宮内 悠輔 印
指導教員	所属・職名		氏名
	法学部・教授		小川 有美 印
自然・人文・社会の別	自然 ・ <input type="checkbox"/> 人文・社会	個人・共同の別	<input type="checkbox"/> 個人 ・ 共同 名
研究課題	「周辺」から現れるポピュリスト政党——先進デモクラシーにおける地域性の意味を探る		
研究組織 (研究代表者・共同研究者) ※2019年3月現在のものを記入	在籍研究科・専攻・課程・学年		氏名
	法学研究科・法学政治学専攻 博士課程後期課程・2年		宮内 悠輔
研究期間	2018 年度		
研究経費 (1円単位)	(支出金額) 200,000円 / (採択金額) 200,000円		

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は、ベルギーで2010年・2014年に国政第一党となった地域主義政党「新フランデレン同盟」(N-VA)を主たる分析事例とした。この際、N-VAと同じ急進的な地域主義政党であり、移民の排斥をも訴える「フラームス・ベラング」(VB)を比較対象とした。2003~2010年の国政選挙における政策の変遷を追い、以下の結論に至った。一方で、VBは排外主義というネガティブな価値観を、相対的にポジティブな価値観である地域アイデンティティと「共鳴」させた。他方で、N-VAは排外主義を「隔離」した上で地域アイデンティティのみを前面化した。さらに、既成勢力との対話を完全には否定しないプラグマティックなポピュリストとしてアイデンティティ政治を展開した。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[アイデンティティ] [政党システム] [地域主義政党]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

(1) 本年度の研究内容を着想した経緯

地域という「周辺」部から出現する地域主義政党は、先進デモクラシーにおいて時に「中央」の既成全国政党を脅かすほどの支持を集めることがある。本研究の問題意識は、そのような現象が発生する仕組みとはいかなるものであるか、ということである。本研究は特に、政党が掲げる政策に注目し、政党システムにおいて地域主義政党がその主義主張をいかにアピールし、その影響力を発揮しようとするかを解明しようと試みた。

研究代表者は、博士課程前期課程在籍時から今に至るまで現代ベルギーを研究対象に分析を進めており、本研究はその集大成ともいえる内容となっている。ベルギーは建国期から現在に至るまで、北部フランデレン地域と南部ワロニー地域での政治対立が続いている。そのため、西ヨーロッパにおいては特に地域主義政党が国政レベルに及ぼす影響力が大きい国家となっている。中でも、2001年に結党し、2010年と2014年には国政第一党となった「新フランデレン同盟」(Nieuw-Vlaamse Alliantie: N-VA; フランデレンを活動拠点とする)の台頭メカニズムは研究代表者の当初からの研究関心であり、修士論文執筆の頃から取り組んでいるテーマである。

本研究では、N-VAの政策変遷を時系列ごとに追跡した。具体的な研究内容を以下で説明する。

(2) 研究段階①—ポピュリズム研究の側面から

本研究は当初、ポピュリズム研究としての色合いを強くして進行した。2018年6月に研究代表者が行った学会報告(詳細は「研究発表」欄を参照)では、ポピュリスト政党としてのN-VAとVBの性質の違いを明らかにすることを目的にしていた。

ポピュリズムは、特に直近10年ほどで急速に研究蓄積が進んだ学問的概念である。その定義の仕方は枚挙に暇がない。研究代表者の見立てでは、概ね「人民」対「エリート」の構図に基づき、反エリート主義(anti-elitism)的な政治的言説を掲げて実行される対エスタブリッシュメント戦略のことを指す。特に右派ポピュリスト政党は、移民・外国人に対する排外主義を伴いながら既成政党・勢力を糾弾することが多い。

ベルギーの事例においては、通常、右派ポピュリスト政党といえばまずはVBのことを指す。N-VAについては、ポピュリストとして扱おうとする試みが散見されるものの、特に現地ベルギーの学界においてはポピュリストとして扱わないのが通例である(たとえば、Pauwels 2014: 42-3)。ポピュリスト政党と見なす場合でも、党首の言動など特定の側面に注目して消極的に定義されることが多い(たとえば、Kalkhoven 2014: 10-1)。

しかしながら、松尾秀哉のように正面からポピュリストと見なす見解も皆無ではない。松尾は、エリート主義的な妥協とそれを担保する合意型デモクラシー国家であるベルギーにはポピュリストの批判の余地が生じたことを指摘した(松尾 2017: 103-7)。さらに、経済危機の状況ではポピュリストが語る「敵」が移民にも特定地域にもなりえたと論じた(同書: 115)。

研究代表者はこの見解にさらに踏み込み、ポピュリストが設定する「敵」の中でも移民と特定地域では違いがあると考えた。つまり、地域主義政党だからこそポピュリズム戦略が成功したということである。

先述の通り、ポピュリズムとは敵対者の代表性に否定的な反エリート主義戦略のことを指す。「人民」に依拠するポピュリズムは、本質的に「下」からの運動となる。一方、地域主義政党という政治組織は中央-周辺間の政治権力の垂直的割り当てを修正しようとする組織である(Mazzoleni and Mueller 2017: 3)。「周辺」地域を代表して「中央」政府への申し立てを行うこの構造は、「下」の人民から「上」のエリートへの糾弾を引き受ける格好をとるポピュリズムの手法を想起させる。組織の性質・政策自体が、ポピュリズム戦略とそもそも親和的なのである。

以上の検討に基づいて、学会発表時点では政策分析に取り組んだ。ただし、その後、学術論文として研究を再考するにあたって新たな視点を導入したため、次項ではまずその経緯を説明する。

研究成果の概要 つづき

(3) 研究段階②—アイデンティティ・ポリティクスの側面から

(2)での検討を基に、学会発表の時点ではポピュリズム分析として本研究は進んだ。しかし研究代表者は、ポピュリズム研究としてN-VAの事例を観察すると、政策分析のみではポピュリストと扱いかどうか疑問が残る点を複数の研究者から指摘された。この点は特に、『日本比較政治学会年報』へ研究成果を投稿する際に問題となった。

これを受け、本研究にはアイデンティティ・ポリティクスという新たなパースペクティブが加わった。そして本研究は、アイデンティティが政治化する状況におけるポピュリストの政治戦略を分析する研究へと昇華された。

そもそもベルギーは、地域対立や権限移譲の観点から、アイデンティティの政治化が常態となっており、地域アイデンティティの動員がとりわけ有効な政治戦略となりうるのである。このような状況の下において、N-VAとVBのポピュリズム戦略の差異は理論的に以下のように整理できる。

VBは、排外主義(ナショナル・アイデンティティへの読み替えも可能)というネガティブな価値観に、相対的にはポジティブな価値観である地域アイデンティティを「共鳴」させるという戦略を採った。そして、既成勢力との妥協を排除し、反エリート主義・移民排斥を訴えた。つまるところ、VBは既存研究における右派ポピュリスト政党とほとんど変わるところがない。地域アイデンティティの政策への利用も、排外主義と同じロジックで行われている。

これに対しN-VAは、ネガティブな価値観である排外主義を「隔離」した。すなわち、正面からこの問題に言及せず、態度を曖昧化した上で、自党が前面化したい地域アイデンティティという 이슈と引き離したのである。

N-VAにおいても1つ特徴的な点は、既成勢力との向き合い方である。N-VAは一方では、キリスト教民主主義政党を始めとする既成政党との対話を完全には拒否していない。この意味では同党は、反エリート主義を採用していないと言えなくもない。しかし他方で、エスタブリッシュメントやワロニー地域に対する安易な妥協を否定している。対話の中で既成勢力へ対抗していくという、このような対エスタブリッシュメント戦略を、研究代表者は「間エリート主義」(inter-elitism)と名付けた。間エリート主義は特に、地域間の交渉を妨げないという点で大きな意味を持った。つまり、N-VAはアイデンティティ・ポリティクスの状況下でプラグマティックな行動を取りうるポピュリスト政党なのである。

以上の理論的検討は、2003年・2007年・2010年の3度の国政選挙におけるN-VAとVBの政策の変遷を追跡することによって証明が試みられた。この分析において、N-VAは2010年までに上記した通りの政党へと変化していったことが明らかになった。なお、具体的な分析作業については、研究代表者の発表物を参照されたい。

引用文献

- Kalkhoven, L. (2014) "Populist Ideological Stances in Western Europe: Contemporary Populism in the Low Countries in the Light of the European Context", *PCS—Politics, Culture and Socialization*, 4 (2).
- Mazzoleni, O., and Mueller, S. (2017) "Introduction: Explaining the Policy Success of Regionalist Parties in Western Europe", in Mazzoleni, O., and Mueller, S., eds. *Regionalist Parties in Western Europe: Dimensions of Success*, Abingdon: Routledge.
- Pauwels, T. (2014) *Populism in Western Europe: Comparing Belgium, Germany, and the Netherlands*, London: Routledge.
- 松尾秀哉. (2017) 「合意型民主主義におけるポピュリズムの成功——ベルギーを事例に」, 中谷義和・川村仁子・高橋進・松下洸 (編). 『ポピュリズムのグローバル化を問う——揺らぐ民主主義のゆくえ』, 法律文化社.

研究発表 (研究によって得られた研究成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。なお、成果発表を確認できる資料を合わせて提出してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

① 宮内悠輔, 「地域アイデンティティと排外主義の共鳴と隔離——現代ベルギーにおける2つの地域主義政党の事例」, 『日本比較政治学会年報』, 第21号, 近刊 (2019年6月頃予定), 頁未定.

② なし.

③ なし.

④ 宮内悠輔, 「地域主義政党のポピュリズム戦略——現代ベルギーを事例として」, 日本比較政治学会第21回大会報告, 2018年6月23日 (於東北大学川内南キャンパス).